

後記

本年度に入り、学内の様子は一新したように思える。原則対面という方針の下で授業が行われ、キャンパスには学生の活気が戻ってきた。二年以上に及ぶオンラインへの対応を試行錯誤する中でメリットも多々みえてきたが、大学生活を満喫する学生たちの生き生きとした表情をみると、大学本来の姿や役割を取り戻したようで清々しさを覚える。一方で、なかなか対面授業に適応できず、生活習慣や心身のバランスを崩してしまう学生も少なからずみられる。こうした学生への対応が当面の課題となろう。

国文学科内でも専任教員の顔ぶれが変わり、新しい雰囲気の中で一年となった。廊下ですれ違い、声を掛け合う機会も増え、我々教員にもバンデミック以前の生活が戻ってきたようである。学会や研究会等、多人数が集まる場では、まだ対面開催に慎重なところも多く、全国の研究者間の交流は以前のような姿に戻ったとはいえないが、その一方でオンラインの恩恵を活かし、ハイブリット開催に踏み切るところもある。国内外を問わず、これまで交流が難しかった遠隔地の研究者とも接点を持つてようになったことは、副産物とはいえ、大きなメリットであらう。

おそらく今後、授業にしろ、学会にしろ、オンライン以前の姿に戻っていくというのではないだろう。これまで以上に円滑な運営ができるよう、対面、オンラインを問わず、長短見極め

てその姿を変えていくことを模索していかなければならない。オンラインの恩恵は授業や大学のあり方、さらには大学教員をはじめとする研究者の働き方にも大きく影響を及ぼそうである。

第65回国文学大会は、昨年度に引き続きオンラインでの開催となった。「消滅危機言語と方言研究」という題目で、三樹陽介先生にお話しいただいた。新任教員の紹介を兼ねた講演ということだったが、コロナ禍での国文学大会開催中止を経て、着任後三年目のご講演となった。現代の日本語諸方言がおかれている状況を概観し、それらを少数言語と同等に扱い、より精緻な記述を行うことで研究が進展していく、ということをお話しいただいた。

本号は専任教員三名による論文と書評一件を掲載することができた。そのうち、加藤邦彦先生は、昨年度退職なさった勝原晴希先生の後任として、今年度駒澤大学に着任された国文学科の新しいメンバーである。加藤先生のご専門は日本近現代詩で、中原中をはじめ、広く日本近現代文学を見通したご研究をなさっている。今後、国文学科を支えていくメンバーとして、大いに期待される。

編集委員 三樹 陽介

加藤 邦彦

山口 智弘